

へんろ道文化に関する調査報告提言書

四国遍路を次の世代に継承するために
(……世界遺産登録、その前に……)



平成26年4月

 愛媛経済同友会

文化芸術立県えひめを考える委員会

へんろ道文化に関する調査報告提言書

四国遍路を次の世代に継承するために
(……世界遺産登録、その前に……)

1. まえがき

現在、「四国八十八ヶ所霊場と遍路道」の世界遺産登録に向けての気運が盛り上がっており、平成 22 年には、四国 4 県で世界遺産登録推進協議会が発足し世界遺産登録に向けた活動を行っている。こうした動きそのものは歓迎すべきものであるけれども、これらの活動は文化財保護法に基づく史跡・名勝、文化的景観等の指定に向けた手続き論が主眼となっていることから、当委員会ではこれらの手続き論から少し離れて、四国各地で過去営々と積み重ねられ継承されてきた遍路文化の現状を見据えて、四国が誇る伝統文化ともいべき遍路文化を、どのように次の世代に継承していくかという論点で提言書としてとりまとめたものである。

なお、提言書のとりまとめに至るまでには、四国遍路の歴史や現状についての理解を深めるために、内田九州男 愛媛大学名誉教授をお招きしての講演をはじめとして、次のような各種の活動を実施してきたところである。

- 内田九州男 愛媛大学名誉教授の講演 四国遍路の歴史について講演 23. 11. 17
- 愛媛県企画振興部地域政策課の説明 世界遺産化登録手続きの現状 25. 3. 6
- 58 番札所 仙遊寺の見学・小山田憲正住職の講話を聞く・遍路道の体験 25. 6. 6
- 八十八ヶ所霊場会の吉川俊宏会長（52 番札所 太山寺住職）の講話 25. 10. 29
- 「四国へんろ道文化」世界遺産化の会 大森寿人 世話人の講話 25. 10. 29
- えひめ地域政策研究センターに委託し、札所の住職やベテランの歩き遍路などの遍路関係者を訪問し、遍路道やお接待の現状等について聞き取りを実施 25. 9 月～12 月

2. 四国遍路の歴史的変遷

本委員会では、平成 23 年 11 月に、内田九州男愛媛大学名誉教授に四国遍路の歴史についての講演をしていただいたところであり、この講演内容等をもとに、四国遍路の歴史を簡単にとりまとめると、概ね次のようなものである。

巡礼の種類には大別すると、一つの聖地を目指して歩く往復型と複数の聖地を巡る回遊型の 2 つのパターンがある。往復型の例は、金刀比羅宮参りや伊勢参り、外国ではスペインのサンティアゴ巡礼などがあり、回遊型の例としては、西国三十三ヶ所や四国八十八ヶ所巡礼が代表的なものである。

四国八十八ヶ所巡礼の起源は、弘法大師空海が修行のために四国を周ったことに

由来すると言われているが、解明されていない部分も多い。しかし、その後の四国遍路の歴史は、大きく二つの時代に分けられる。そのひとつは、まず、「僧侶が修行として巡礼を行う時代」（古代・中世）と、続いて「庶民が大願成就の旅として行う時代」（16世紀以降）というふうに分類できる。歴史的な変遷としては、僧侶の修行のための巡礼として発生し、その後、戦乱が収まる16世紀以降に札所の数を八十八箇所限定したことで庶民化・大衆化が図られ、現在に至っているということになる。

現在、遍路（巡礼）の手段は歩き遍路のほかに、バスツアー、マイカー、自転車など多様化しており、また瀬戸内海の島嶼部においては、島四国と呼ばれる四国霊場の縮小版（写し霊場）も盛んに行われている。

遍路を行う目的も、中世は「修行」や「現世と来世の幸せを願う」ものであったのに対し、現代の遍路は「供養」「自分探し」「健康管理」「悩みからの脱却」など多様化しているが、来世のことではなく「現世のことを願う」巡礼になっているとすることができる。

しかし、四国遍路が過去のものではなく、時代が変わっても歩く条件が整えられていて今も生きて使われているルートであることは重要な意義があることである。

3. 世界遺産登録の現状

世界遺産には自然遺産と文化遺産があり、四国4県が目指しているのは、「四国八十八ヶ所霊場と遍路道」が世界文化遺産として登録されることである。

世界遺産登録のための手続きは、大ざっぱに言えば、国内の手続きを経て、次にユネスコの国際的な手続きに移る。

国内の手続きは、まず、地方公共団体が文化庁へ候補地を提案し、それを文化庁の文化審議会が審議のうえ認められれば、暫定一覧表に記載される。この暫定一覧表は、ユネスコの世界遺産委員会へ提出され、その後政府から正式に推薦されることとなる。

次に各国からの推薦を受けたユネスコでは、まず、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）が事前審査を行った後に勧告を行い、その後、最終的に世界遺産委員会の審査にパスすれば世界遺産として登録されることとなる。

こうした長い手続きを経て世界遺産に登録されれば、世界に唯一のものであるという高い評価が世界的規模で確立することとなる。



なお、世界遺産委員会が示している登録基準（文化遺産の場合）は、書き記すと次のようになり、表現が難解ではあるが、次のいずれか一つ以上を満たすことが求められる。

- ① 人類の創造的な才能を現す傑作である
- ② 建築物、科学技術、記念碑、都市計画の景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流、またはある文化圏内での価値の交流を示すもの
- ③ 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統、または文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも稀有な存在）である
- ④ 歴史上の重要な階段を物語る建築物、その集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である
- ⑤ ある一つの文化を特徴付けるような伝統的居住形態、もしくは陸上・海上での土地利用形態を代表する顕著な見本である。または、人類と環境との触れ合いを代表する顕著な見本である。特に不可逆的な変化により、その存続が危ぶまれているもの。
- ⑥ 顕著な普遍的価値を有する出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接的に、または実質的に関連がある。

ところで現在、「四国八十八箇所霊場と遍路道」が登録手続きのどの段階にあるかと言えば、平成 18 年 11 月に提案書を提出するも継続審議となり、平成 19 年 12 月に改めて再提案書を提出したものの、要修正として暫定一覧表への記載は見送りとなっており、国内手続きの段階で足踏みをしている状態である。

今後、世界遺産登録に向けての手続きを進めるに当たって、文化庁の文化審議会から指摘されていることは、「構成資産の大半が文化財として保護されておらず、～（中略）～文化財の指定・選定を含めた保護措置の改善・充実に向けた取り組み等が不可欠である。」ということであり、この評価を受けて行政においては、札所の文化財としての価値を調査するとともに、関係者間の連携・意思疎通体制の整備・充実に努めるため、世界遺産登録推進協議会を設立し、官民を挙げて取り組んでいるところである。なお、現在は使われなくなって荒れている愛南町平城から宇和島市津島町に至る宿毛街道「中道」約 30 kmを復元すべく、「四国へんろ道文化世界遺産化の会」のメンバーが寄付金を募るなどしながら、草刈りや丸木橋を架け、廃れたへんろ道の復元整備作業を行っているところである。



4. 愛媛における四国遍路の現状

(1) 平成 25 年 9 月から 12 月にかけて、札所の御住職やベテランの歩き遍路の方などの遍路関係者を訪問し、お接待の状況や遍路道の現状などについて聞き取りを実施した。

① 札所の住職からの聞き取り

○ 58 番札所 仙遊寺 小山田憲正 住職 (平成 25 年 10 月 15 日(火))

○ 45 番札所 岩屋寺 大西完善 住職 (平成 25 年 11 月 22 日(金))

② ベテラン歩き遍路からの聞き取り

○ 新居浜市 木下昭三さん(霊場会公認先達)(平成 25 年 9 月 10 日(火))

○ 奈良県大和郡山市 山下正樹さん(霊場会公認先達)(平成 25 年 11 月 5 日(火))

③ お接待グループからの聞き取り

○ 伊方町 塩崎満雄さん (平成 25 年 10 月 30 日(水))

○ 松山市窪野町 相原誠則さん (平成 25 年 11 月 23 日(土))

(2) 聞き取りの結果(主な意見)

聞き取りの結果を項目別に取りまとめると、概ね次のような内容であった。

○ 歩き遍路の魅力について

- ・ 歩き遍路をする動機には 4 つのパターンがある。①自分探しの旅 ②信仰心から ③金がなく生活のため ④健康づくりのため の 4 つである。③の人は最近ほとんどいない。①の自分探しと④健康づくりの人が多いように思う。
- ・ 阪神大震災や東日本大震災の後には数が増えたと思う。家族を亡くした喪失感や供養の気持ちから遍路をするようである。

○ 遍路(巡礼者の)今昔の変化について

- ・ 昔は部落代表で回る人や、修行のために回る僧侶がいたが最近は少ない。
- ・ 一時の遍路ブームは過ぎて、人数的には落ち着いている。バスツアーの人が多いが、歩き遍路も増えてきている。

○ へんろ道の現状と問題点について

- ・ 街中ではコンビニでトイレが借りられるが、山道でトイレに困る。
- ・ 近年は、国土交通省もベンチの設置などで協力してくれるようになった。
- ・ 舗装道路を歩くのは足にこたえる。土の道が足に優しい。
- ・ 逆打ちのための標識整備ができていない。



- 歩道がなく暗いトンネルを歩くのが危険で、遍路がはねられる事故も起きている。社会全体が車優先の道路づくりになっているので、歩きづらい。
- かつて林業が盛んだった頃は、山仕事のためにたくさんの人が山道を歩いていたので、山道が傷んでもすぐに見つかるし、すぐに誰かが修繕してくれたが、近年は山に人が入らなくなり目が届かなくなって、道に倒木があったりする。
- 札所が中心になって、道の維持管理ボランティアを組織することができれば理想であるが、やはり行政の手助けはほしい。
- 道の草刈りをするにも、寺の周辺も過疎化・高齢化しており、壮年の人がいないので大変である。街の若い人の手助けがほしい。
- 県内の遍路道は 1980 年代頃まではかなり荒れていたが、へんろみち保存協力が草刈りを行ったり、小さな標識（表示板）を付けるなどして整備が進んだ。その後、世界遺産化の話が出始めて行政の理解が得られるようになり、行政（役場など）も道の整備に乗り出してくれるところも出てきた。
- 歩道と車道の区別のない国道や歩道表示の白線が引いてある形だけの歩道が危なく、何度も身の危険を感じた。また、長く暗いトンネルが一番危険である。
- 遍路道を世界遺産にしようという行政・民間組織・大学関係者等が活動しているが、そうしたメンバー自身が八十八ヶ所遍路道を歩いた経験がない人がほとんどなのが問題である。一日遍路体験程度ではダメだが、一国打ち（1 県だけ）でもいいのでぜひ自分の足で歩いてほしい。

○ お接待の今昔の変化について

- 昔は県外からもお接待講が来ていたが、近年は廃れた。
- へんろ道の草刈りやゴミ拾いをするのもお接待の一種と考えている。
- 通夜堂に無料で泊めることもお接待である。
- お接待をする人は、遍路に接して自分ができない体験や気持ちを聞きたいと思っている。お接待をすることで刺激を受けることができるのがいいところである。
- お接待の多少は、地域ではなく季節による。毎年 3 月後半の春休み頃になるとお接待が増える。
- 昔はお接待のための「講」があり、和歌山や関西圏の人が講を作り、わざわざ



ざみかんやうどんを持って来て札所でお接待をしていた。愛媛でも太山寺へ別府（大分県）辺りからお接待の講が来ていた。

- 無料で宿を提供する「善根宿」については、かつては善根宿のネットワークがあり、善根宿のガイドブック的なものもあったが、マナーの悪い遍路がいたり火の始末が不徹底で火事が起きたりして、現在は、積極的に「善根宿」をPRしないような風潮になった。

○お接待する理由

- お接待をするのに大げさな哲学はなく、田舎の仲間のコミュニケーションの場として続けている。もちろんお遍路さんをもてなす気持ちはあるが、義務感ではなく、むしろ何となく続けているような感じである。今後も無理なく続けていきたい。
- 地区には2つの札所があるが、お接待をするのは札所に頼まれたわけでもなく、メンバーも必ずしも札所の檀家というわけでもない。もともと地区には屋号が「茶屋」の家があり、お接待をする風習があった。
- 自分の住む集落では、昔は春と秋に「お大師さんの日」という「お接待の日」があって、集落内で皆が食材を持ち寄って互いにお接待を行う習慣があった。自分はその思いをつなぐつもりでお遍路さんに対するお接待を行っている。

○お接待するうえでの問題点

- お接待グループのメンバーが高齢化しており、いつまで継続できるかが問題である。意思を引き継いでくれる若い人がいればよいのだが、今のところはいない。
- 男性中心の活動メンバーになっており、女性の参加が少ない。メンバーを増やしたいが無理には活動に参加させないようにしており、無理のない活動の進め方にしている。
- お接待場所として使っている坂本屋は個人所有の建物で、最近雨漏りするようになって修繕費の捻出に苦慮している。現在、修理のための寄附集めを計画中である。
- お接待場所としている旧へんろ宿の建物の修繕作業は、「自分たちでやろう」ということで、つてを頼って大工、電気工事店、水道屋などに来ていただき、無償で作業をしてもらった。行政の補助金はもらっていない。

（３）聞き取りの結果から見た現状と考察

① へんろ道の維持・保存について

へんろ道は、昔はひどく傷んだ道もあったようだが、現在は、へんろみち保存協力会の活動や国土交通省や地元自治体の協力も得られるようになったこともあり、歩けないほどのところはなく概ねは良好な状態と考えられる。

ただ、台風の後などには山道に倒木があったりして荒れていることもあるようである。

なお、宿毛街道「中道」では、「四国へんろ道文化世界遺産化の会」のメンバーが草刈りや丸木橋を架けるなど、廃れたへんろ道の復元整備作業に尽力しているところである。

また、車道を歩く部分では、夏はアスファルトの照り返しで暑さが厳しく、古いトンネルでは歩道がなく暗いため大変危険である。

山道や次の札所までの距離がある区間などでトイレや休憩所が不足しているという声もあった。また、標識もへんろみち保存協力会の努力等により、概ね整備されてきているが、逆打ち（逆回り）をする場合には十分な標識整備ができていないという声もあり、これらが今後の課題と考えられる。

② お接待の継承について

お接待をしている人がお接待を始めたきっかけは、札所の依頼などの外的な要因によるものではなく、地縁・血縁関係のグループが自発的かつ自然発生的にできて始めたものが多い。

これはもともと集落でお接待をする慣習や伝統があり、子供の頃からそれを見て育ち、自然にその考えを受け継いで実施し始めたものと考えられる。これは長い間かけて培われ、四国に定着している風習・伝統であると考えられる。

ただ、現在グループの中心になってお接待を実施している方は、年配の方が多く、今後若い方に活動が引き継がれていくかが課題となる。地元には若い人が減っており、都会の若い人をボランティアとして組織化してお接待や道の草刈りの手助けをするシステムが今後必要になってくると考えられる。

5. 四国遍路を次の世代に継承するための提言

遍路道は、四国一円に点在する88の札所を結ぶ1,400 kmにも及ぶ長大な巡礼道路であり、本来巡礼のためだけに整備されたものではなく、地域の生活道や農道、林道などが巡礼のために利用されているものであり、周辺の地域社会によって維持・管理されてきたものである。こうした風習・伝統がこれからも継承されていくようにする必要がある。

このため、今回の調査報告を取りまとめるに当たっては、世界遺産化を進めるその前に、まず原点に帰ってこれからの四国遍路のあり方を考えると、①歩き遍路が安心・安全に歩くことができ、かつ ②気持ちの良いお接待を受けることができる環境が継続できるようにという2つの考え



方に基づいてとりまとめのうえ、ハード整備だけでなく、地域社会において地元の人が伝統を継承していくことができるような内容の提言を考えてみた。

(1) 歩き遍路が安心・安全に歩くことができるように

- ① 地域、特に山間部の集落においては、住民の高齢化により遍路道の維持補修作業が困難になっているという声があることから、へんろ道の草刈りや簡単な補修を行うボランティア隊を組織し、そこに街の若者をへんろ道に呼び込むシステムを作る。まず、地元の大学の協力を仰ぎ、最初は講義の一環などとして草刈りなどを体験してもらい、これをきっかけにして興味を持った学生には、へんろ道保存団体や住民団体が実施する作業に参加してもらう形で、若者の参加の輪を広げていく。

なお、徳島県では、徳島文理大学の学生のボランティア団体が、へんろ道の美化環境整備を行っている事例がある。

作業の合間に、お接待グループによるお接待や交流が付け加わればなお、プラスの効果が見込まれる。

- ② 歩道がなく照明が暗いトンネルについては、今回の聞き取りでも改善してほしい旨の話があったほか、平成 18 年に愛媛大学（野崎賢也助教授：肩書きは当時）が遍路 461 名（内歩き遍路は 44 名）に対して行ったアンケート調査の結果を見ても、「歩く距離が長くなっても狭いトンネルや車道を避けたいと思う」という回答が 75%にのぼっており、狭く暗いトンネルの危険性を多くの歩き遍路が認識していることが伺われる。このため、トンネル管理者である行政に歩道の設置や照明の改善を依頼するとともに、とりあえずの策として、トンネルの両方の入口に、歩き遍路用の「反射たすき」を備え付けてトンネル内で着用してもらい、自動車からの視認性を高めて安全性を高める。
- ③ 休憩所（東屋）やトイレが不足している区間については、行政へ設置の願いをする、若しくは、補助制度を持つ財団からの支援を依頼するなどにより、休憩所やトイレを設置することも必要。
- ④ 標識・道標については、充分整備されているという声がある一方で、逆打ち用の標識が不足しているという声もあり、また、前述の愛媛大学のアンケート調査の結果を見ると、遍路道に求めるものとして「道しるべの多い道」を上げる遍路が最も多かったという結果もあり、手作りでもよいので道しるべはたくさんあった方がよいと考えられる。このため、①で述べたボランティアの若者に手作りの道しるべの作成・設置作業をしてもらう機会を作れば標識が増えて、歩き遍路の安心感を高めることができる。

（歩き遍路者数：平成 15 年 10 月から平成 16 年 9 月の国土交通省 四国地方整備局 徳島河川国道事務所の調査では、年間約 3,800 名と推定）

(2) 気持ちの良いお接待が続けられるように

四国各地の集落には、もともと古くからお接待の習慣や風習があり、それら

が今でもお遍路さんをお接待する文化として継承されていることがわかったので、そうした伝統を継承するために、次のようなことを実施してはどうか。

- ① お接待実施グループの活動が盛んな地域のお接待所や休憩所において、地元の子供や大学生が実習体験として、お接待グループと一緒にお接待を行いながらお接待の心を学ぶ場とする。何度かごとにその場に先達さんを招き、語り部として遍路の歴史などについて話をしてもらい、啓蒙を行う臨時の「遍路センター」のような場とする。子供や若者に遍路やお接待文化を継承していく拠点とする。
- ② 大学の掲示板やインターネットでの募集などにより、都市部の若者に呼びかけ、お接待の体験ボランティアをしてもらい、興味を持った学生にはお接待実施グループや住民団体が実施するお接待に参加してもらう形で、若者の参加の輪を広げていく。

(3) 四国遍路を世界に発信

世界遺産化への動きが進展していることもあり、四国遍路が富士山や和食のように日本固有の文化として世界から注目される機会も多くなっていくと考えられる。そうしたなかで、四国遍路や遍路道は、歩く人がいるからこそ現在まで残ってきた文化であり道であることから、世界中から四国へ来て遍路を体験してもらうために、インターネット等を通じて世界へ情報発信していくことも必要になってくる。世界遺産登録推進協議会の中心であり国ともパイプがある県の協力を仰ぎ、キャンペーンとして地道に発信していくことが大切である。

6. おわりに

今年、平成26年は弘法大師が四国八十八ヶ所霊場を開いたとされる弘仁6年(815年)から数えて1200年目の「四国霊場開創1200年」に当たる。この間、四国遍路は僧侶の修行の道場として、また、弘法大師を慕う民衆の心の拠り所として、長い年月歴史をはぐくみながら現在まで続いている。また、現在「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録に向けて、平成28年度に国内暫定一覧表に掲載されることを目標に掲げ気運が盛り上がり、こうした今の時期に愛媛経済同友会としても、行政や保存会の動きとは別に札所や道の保存のハード面だけではなく、お接待に代表される遍路文化の継承にスポットを当て、提言をとりまとめたものであるが、遍路文化の維持、継承の一助になれば幸いである。



へんろ道文化に関する調査報告提言書

資 料 編

1. 札所の住職からの聞き取り	
(1) 58番札所仙遊寺 小山田憲正住職	12
45番札所岩屋寺 大西完善住職	15
2. ベテラン歩き遍路からの聞き取り	
(1) 新居浜市 木下昭三さん(霊場会公認先達)	17
(2) 奈良県大和郡山市 山下正樹さん(霊場会公認先達)	21
3. お接待グループからの聞き取り	
(1) 伊方町 塩崎満雄さん	24
(2) 松山市窪野町 相原誠則さん	27
4. 聞き取り調査項目	30

札所の住職からのヒアリング結果について（10/15）

日 時：平成25年10月15日（火）15:20～17:20

相手方：58番札所仙遊寺 小山田憲正 住職

【お接待の現状について】

- 仙遊寺の周辺のことを言えば、参道の草抜き、ゴミ拾いを、個人で20年以上やってくれている人もいます。また、地元の人がボランティア団体を組織して、麓から寺へ上がる三叉路沿いにお接待所を作って、月1回お接待をしてくれている。
- 昔は、講社の人が他所からやってきてお接待をしていた。大洲の小学校の横で、お接待所を作り教育の一環でお接待をやっていたこともあった。仙遊寺では広島から来た講がお接待をしており、特に祭りや火渡りの行事などにあわせてミカンを配るなどのお接待をしてくれている。和歌山からのお接待講が有名であったが、今はお接待講はほとんどなくなっていると思う。
- お接待講がなくなった原因は、世の中の生活スタイルが変化したことと、地域のつながりが希薄になってきて、農作業を地域で助け合いながら行うというような集団で何かすることが減り、個人主義になってきたことと関係があると思う。
- 昔と今のお接待の変化については、お接待で渡す（配る）物品については、大きな変化はなく、ミカン、米、飲み物などである。少し変わったものとしては、食べ物ではなく色紙で折った鶴などもある。
- 近隣住民が自発的に札所やへんろ道周辺の整備（草抜きなど）をすることもお接待ととらえている。また、寺に併設している無料宿泊施設「通夜堂」を利用してもらうことで、札所としてもお接待をしていると思っている。お接待を受ける側の心構え次第で「ありがたみ」が違うのではないか。
- お接待の変化としては、お接待を受けるに際しての心構えがよくない遍路がいるという問題がある。歩き遍路に「車に乗っていかないか」と声を懸けたら、「乗せてくれなくていいから、食事代をくれ。」と言われたことがある。金や食事を自分から「要求する」のは、もはや遍路ではない。遍路とは、本来、お大師様の身代わりとして四国を回っているのだという心構えが必要。また、若いのに

四国を何周もしているので、人格者かと思ったら、金の札を見せびらかして高く売っている者がいたりする。

- 今でも、県内の人（三崎の塩崎さん）が、7～8人のグループで、毎月1回お接待のために寺に来てくれており、感謝している。お接待で渡すものの内容は、みかんジュースやイモ団子などである。

【遍路道について】

- 街中の道は、コンビニなどでトイレを借りることができるが、山道に入るとそれがないので、山道にトイレがほしい。ただ、維持管理の問題があるので、実際はなかなか難しいと思うが。
- 国道の歩道は、夏は炎天下で街路樹も少なく日影が全くないのでつらい。雨の日の通過する自動車の水たまりの水はねや暗くて危険なトンネルも改善してほしい。また、舗装道路をずっと歩くのは足に良くない。土の道が足に優しい。
- 大きな道には、寺を示す大きな看板もできたが、歩き遍路のための小さな道標（みちしるべ）がまだ足りない。逆打ちの人のための道標も整っていない。
- 国道に関しては、国土交通省に国道の清掃やベンチの設置を依頼したところ、今治市内でベンチの設置が実現した。国土交通省も最近は暖かい目で見ってくれる部分も出てきた。へんろ道沿いのゴミ拾いに行政も協力してくれるようになった。
- 徳島では、廃れていた昔の「かも道」を地元の人が再整備して復活させている。南予の「中道」整備も頑張っている。今治周辺の遍路道でも、昔の遍路道のルートにあった川を渡る丸木橋を復活させてもよいのではないかな。

【遍路の変化について】

- 服装については、今は白衣の人が多い。すげ笠や数珠・金剛杖は必携で、これがあるだけで一目でお遍路さんだと認識できる。
- 昔は、地域の代表や青年団のリーダーが、その団体を代表して代参すること多かった。僧侶が修行として回ることもあった。知識を持った僧侶が、行く先々で知識を伝えることにより伝播していくという面もあったのではないかな。

- 一時、遍路ブームがあったが、現在は遍路の数は落ち着いていると思う。今はカーナビが普及したので、自家用車で1～2人で来る遍路が増えたように思う。
- 最近では、バスが荷物だけを運んで、人だけが歩く遍路ツアーもある。

【その他】

- 一宗一派にとらわれず、いろいろな宗教、宗派の人が巡礼するのが四国遍路の特色だと思う。遍路とは、迷いがあったが、過去をリセットし遍路をすることによって悟りに至るというところに意義がある。スペインの巡礼も体験したが、四国遍路の方がおもてなしの度合いとしては優れていると思う。
- 遍路の姿は時代を映す。昔は、死出の旅として回る遍路も多かったが、戦後は戦死した肉親の供養のために回る人が目立ち、今はリストラされて遍路をしている人も多い。
- 今、よく見かける遍路の姿を年代別に分類すると ①大学生が夏休みに回る ②30代の人が仕事や人生に疑問をもって回る ③定年を迎えて時間ができた60代の人が回る というふうに分けられる気がする。
- 行政との協力という点においては、せっかく協議会（世界遺産登録推進協議会）があるのだから、定期的に意見を出し合って、行政の行き届かないところを民間レベルで取り組むなど、もっと積極的になればよいと思う。

札所の住職からのヒアリング結果について（11/22）

日 時：平成25年11月22日（金）10:15～12:00

相手方：45番札所岩屋寺 大西完善 住職

【お接待の現状について】

- 岩屋寺の周辺でのお接待はあまり多くないと思う。以前は春の縁日などに集落の人がモチを配ったりしていた。遍路道の道筋で地域の人が少しはお接待を行っていると思うが把握していない。
- 昔は、通夜堂にお遍路を泊めていたが、今は通夜堂がなくなったので、泊めていない。15年くらい前まではバスで来るツアー客も20人～60人くらい泊めていたが大人数の人を泊めるのは大変だった。
- 岩屋寺にはお接待講が来たことはないと思う。松山の西林寺には来ていたと聞いたことがある。
- お接待で渡す（配る）物品については、昔は米を貰ってそれを集めて宿で炊いてもらうことが多かったが、今は飲み物の自販機が多いので、金（硬貨）を渡すことが多い。修行で回る場合は、1日に7回はお経を上げるのが通例。
- 今は遍路の装束や装備もよく整っているが、昔はみすぼらしい恰好だったので、同情から物を与えるという気持ちがあったのかもしれない。久万へ入ってくる遍路は、内子を通ってくるので、内子で柿や梨を貰ってくる人が多い。
- お接待をする人は、遍路に接して自分ができない体験や気持ちを聞きたいと思っている。私（住職）自身もそういう時間を持ちたいと思う。お接待をすることで刺激を受けることができるのがいいところである。

【遍路の今昔】

- ツアーで来る団体のお遍路は、短いお参りになるが、短時間でも札所で手を合わせて自分を見つめる時間を持つことができる。歩き遍路は、それぞれの心配事や家族を亡くした心の癒し、就職の行き詰まり、リストラなどをきっかけにして、そこから立ち上がる気力を起こさせるきっかけや心機一転のための思いつきとして始めることが多い。人生の区切りとして遍路をする人が多い。

- 以前は、遍路の講があったが、30 年くらい前から下火になってあまり見かけなくなった。

【遍路道について】

- 近大の先生が、各地に休憩ができるへんろ小屋を作っている。八十八ヶ所作ることを目指しているそうである。
- 畑野川へ抜けるトンネル（峠御堂トンネル）に歩道がなく危険で、遍路がはねられる事故も起きている。車優先の道路づくりになっているので、歩きづらい。夏の舗装道路は暑く危険である。
- 岩屋寺は山の中にあるので、かつて林業が盛んだった頃は、山仕事のためにたくさんの人が山道を歩いていたので、道が傷んでもすぐに見つかるし、すぐに誰かが修繕してくれて気配りが行き届いていた。近年は山に人が入らなくなって、目が届かなくなって、道に倒木があったりするようだ。
- 以前は、松山市の宮崎さんが中心になって遍路道の整備をやってくれていたが、宮崎さんが亡くなってから活動がどうなっているか承知していない。
- 札所が中心になって、道の維持管理ボランティアを組織することができれば理想であり、できる限り努力はするが、やはり行政の手助けはほしい。
道の草刈りをするにも、寺の周辺も過疎化・高齢化しており、壮年の人がいないので、大変である。街の若い人の手助けがほしい。

【その他遍路について思うこと】

- 遍路と札所については、歴史の重みを感じている。四国遍路の由来については伝説のような部分もあるが、江戸時代以降の札所の歴史は、かなりはっきりしており、四国遍路を回ってこないと言われた時代もあった。また、春には、岩屋時をスタートとして松山 10 ヶ寺を回るツアーがあり、南予や島の人がよく来ていた。
- 最近では、外国人の歩き遍路が増えており、1～2 人で回っている。外国人でも予備知識や装束がきちんとしている人が多い。日本人の歩き遍路も増えており、若者と熟年の人が多いように思う。

ベテラン遍路さんへのヒアリング結果について（9/10）

日 時：平成25年9月10日（火）9:00～10:30

相手方：世界遺産化の会世話人・霊場会公認先達 木下昭三さん（58 歳）

【遍路の概況】

○ 自分（木下）は、これまでに延べで 10 回以上、八十八ヶ所を回った。県内の札所に限れば 20 回くらいは回っていると思う。最初に回ったのは 40 歳のときで、最初の 3 回は自転車で回ったが、峠越えなど自転車では難しい場所があるため次第に歩き遍路に移行していった。回っていると、歩き遍路は県外の人が多く、逆に愛媛県内の人には車で日帰りが多く、宿泊する人が少ない。また車なので宿泊するのは、旅館・ホテルが多く、歩きの遍路宿や宿坊の利用はまれである。

○ 歩き遍路をしている人の動機には大きく分類して 4 つのパターンがみうけられる。①自分探しの旅 ②信仰心から ③無銭のため ④健康づくりのため である。③の人は最近ほとんどいない。①の自分探しと④健康づくりの人が多いように思う。特に、④健康づくりの人は、納経帳に印をもらうスタンプラリー化している。

なお、②信仰心から歩き遍路をする人は、阪神大震災や東日本大震災の後には数が増えたと思う。家族を亡くした喪失感や供養の気持ちから遍路をしようとしたのだと思う。②信仰心で札所を回っている人は、人数としてはバスのツアーで来る人が多い。高齢になって歩いて回ることができないのでバスや車で回っているのだと思う。

【お接待について】

○ 通常、遍路は徳島の 1 番札所から回り始めるが、最初のうちは遍路自身もお接待を受けることに慣れていないので恥ずかしくてお接待を受けない人もいるが、徳島から高知へ入る頃（23 番→24 番）になると次第に慣れてきて、素直にお接待を受けるようになってくる。お接待もいろいろであるが、お茶、缶コーヒー、お金（100 円程度・時には千円）、餅、飴、季節の果実などである。お金については、自動販売機のコーヒーが 100 円だった頃は 100 円だったが、最近は自販機が 120 円になったので、包みを開いて 120 円入っていると心遣いにうれしくなる。印象に残っているお接待所は、（徳島の）牟岐駅の近くのお接待所で、地域の人が交替で運営しているようで、遍路シーズンや土日等は、いつ行っても必ず常駐していた。

- 愛媛県内でのお接待で印象に残る特徴的なところは少ないが、お接待の多少は、地域ではなく季節による。毎年3月後半の春休み頃になるとお接待が増える。例えば松山近辺でも、48番西林寺でお接待を受けて、少し歩くと49番浄土寺でまたお接待があり、51番石手寺に着くと、また、というふうに、春の遍路シーズンになるとどこへ行ってもお接待をしているというような状況になる。3月の土日は、多くの札所でお接待をやっているような気がする。

10年ほど前に歩き遍路をしていると、宇和島、旧津島町で米（生の米）のお接待の申し出があったが、自炊の野宿遍路ではないので辞退させていただき、お礼のおさめ札を渡したところ、自分に手を合わせて拝んでくれる人もいた。遍路を拝むのではなく、遍路の後ろにいる弘法大師を拝む気持ちだろうと思う

- お接待を受けると、お返しに納め札を返すのがルールであるが、最近はこのルールを知らない人も多い。昔は納め札をたくさん集めると、その家は火事に遭わないなどの御利益があるという言い伝えもあった。最近は、そうした信仰心からお接待をするというよりは、地域おこしやボランティアとして地域をあげてお接待するというようなところも出てきた。

- 昔のお接待で特徴があるのは、お接待のための「講」である。かつては、和歌山や関西圏の人が講を作り大規模であったが、今でも、みかんや手拭いを持って来て徳島の札所（1番霊山寺、19番立江寺、23番薬王寺等）でお接待が見受けられる。

愛媛でも52番太山寺へ別府（大分県）からの講が来て、うどん等のお接待をしていたが、戦後は廃れて今は来ていない。

- お接待のうち、無料で宿を提供する「善根宿」については、10年以上前に善根宿のリストが出回った事があり、職業遍路や学生などが口コミで利用していたが、マナーの悪い遍路や火の始末が不徹底で火事が起きたりして、現在は、積極的に「善根宿」をPRしないような風潮になっているし、やめた善根宿も多い。今でも利用できる場所は、歩きのベテラン遍路は知っている。

県内でよく知られている善根宿は内子町（旧内子町）大瀬の千人宿大師堂。他にもいくつかはあると思う。自分（木下）の曾祖父も、新居浜で善根宿“横屋”をやっていたが、昭和になってからやめたと聞いている。今後、同じ場所で再興できればと思っている。

- 宿については、58番仙遊寺のように宿坊を備えている札所もあるし、頼めば宿

坊以外のお堂に無料で泊めてもらえるところもある。松山市内の札所でも、女子大生のグループが住職にお願いして、本堂前で野宿をさせてもらっていたが、これは各札所の個別判断であり、通常は許可されないと思う。許可の場合でも火事が怖いので、火（蚊取線香・コンロ）の使用禁止はもちろんの事である。

【遍路道について】

- 県内の遍路道は、1980 年代頃まではかなり荒れていた。しかし、その後、へんろみち保存協力が草刈りを行ったり小さな標識（表示板）を付けるなどして整備が進んだ。その頃から世界遺産化の話が出始めて、行政の理解が得られるようになり、行政（役場など）も道の整備に乗り出してくれるところも出てきた。
- 県内の遍路道は、「四国の道（四国自然歩道）」と重なっている部分が多く、その部分が壊れた場合は、国土交通省あるいは環境省の予算で直してもらえる場合も多い。
- 県内の遍路道については、最近はよく手入れされていて健常者が歩く分には危険な個所はなくなったと言ってもよいと思う。危険個所としては、旧小松町の湯浪から 60 番横峰寺へ登る山道と、そこから 61 番香園寺へ下る山道が台風の豪雨で崩れたことがある。
- 正規の札所を結ぶ遍路道は、ほぼ問題ないが、番外の札所や奥の院へ向かう道は整備されていない場所もあり、山道で遭難しそうになったこともある。65 番三角寺の奥の院の仙龍寺への道は 10 年程前まではあまり整備されていなかったが、その後は地域の方や歩き遍路のボランティア活動により整備されてきており、昔ながらの遍路道として復活中である。

【札所について】

- 県内の札所の変化について。歩き遍路に対する態度（接し方）は住職による。以前は住職自身が納経所におられる場合が多く、直接お接待を受けたり、説教を受けたり、親切な住職がいた。最近は世代替わりもあり、また、納経所に住職がいる時間が、たいへん少なくなってきており、対応が事務的になってきた。（全部ではないが、代が替わるとレベルが下がっている気がする。）

【総括的に】

- 戦後しばらくは、食い詰めた者が似非遍路になって米や金をせびりに来るので、

遍路は地域住民に嫌がられていた。当時はそのような人を「ヘンド」と呼んでいた。今はそうした者はほとんどいなくなったと思う。

- 遍路について最近感じることは、世界遺産化の話が出てきてから遍路も市民権を得たのは良いこと。先ほどの似非遍路がいなくなってきて、住民にも遍路に対する変な先入観がなくなってきた。
- 自分は、世界遺産化の会の会員として活動はしているけれども、四国遍路は種々の構成要素から成る「文化」とであると個人的には思っているので、物として世界「遺産」にするのがよいかどうかは疑問に感じる部分はある。ヨーロッパ（スペインなど）の巡礼は、1箇所の聖地を目指して歩いていくという点で、四国八十八ヶ所の巡礼とは感覚的に異なると思う。四国遍路に対して日本人が抱いている感覚がイコモス（ICOMOS・国際記念物遺跡会議・本部パリ）の人たちに理解できるのかどうかもよくわからない部分もある。

ベテラン遍路さんへのヒアリング結果について（11/5）

日 時：平成25年11月5日（火）

相手方：霊場会公認先達 山下正樹さん（69 歳）

歩き遍路・奈良大師講 講元

【自己紹介】

遍路歴は13年になる。そのうち、通し打ち6回（内逆打ち4回）、区切り打ち4回の計10回四国を回った。

注：（1番から88番まで一度に巡ることを通し打ち、何度にも区切って巡ることを区切り打ちという。仕事の合間の休みを利用して7年かけて歩きで結願した人もいる。）

【遍路の概況】

- 札所と札所の間で人や自然と触れ合うことが、歩き遍路の大きな魅力である。札所は重要な文化財の宝庫であり、安らぎの場所でもあるが、あくまで点であり遍路道が線だと感じている。
- 以前は、一人歩きの遍路が多かったと思うが、近年は定年退職後の高齢者、中年の夫婦二人歩き、友人とのグループ、学生、若年層の野宿遍路が多いと思う。

【遍路道の現状と問題点】

- 歩き遍路は約1,200km、そのうち、自然の土の道は約200kmある。但し、自然の中を歩くので特に危険な箇所というのはあまり感じていない。それよりも、舗装された国道、県道などの1,000kmのほうが危険だと感じている。歩道と車道の区別のない国道や歩道表示ラインが消えている道、白線が引いてあるだけの形だけの歩道表示、特にカーブが多い坂道は、大型車が急スピードですぐそばを通り、何度も身の危険を感じる。また、長く暗いトンネルが一番危険だ。
- 遍路道のうち自然の道は約200kmしか残っていない。自然の道ゆえ、雨風にさらされ、がけ崩れや倒木などで形が変わることもある。しかし、その遍路道を誰が整備するかが一番の問題である。
- 山中の遍路道を誰が守り、補修し、草刈りをするのかが一番の問題である。これまでは、松山のへんろみち保存協力会の故宮崎建樹先生と共にベテラン遍路たちや各地域の方々がボランティアで作業してきたが、それらは一般には知ら

れていない。

これまで遍路関係者は、自分たちも関係者と言う認識がなく甘えすぎだと思う。この問題こそ、一番重要な問題であるが、みんな知らん顔して逃げている。四国八十八ヶ所霊場会、行政、産官学が中心になり真剣に取り組むことが必要である。

注：（「遍路関係者」とは、一言で言うと、お遍路を生業としている人のこと。具体的には、四国八十八ヶ所霊場会と各寺院、公認先達、宿泊関係者等、広くは、おへんろ研究者、行政関係者、産官学で遍路道を論ずる人も含まれると思う。）

【お接待の現状】

- 現在、お接待所は各地にあるが、代表的なところは次のとおり
 - ・ 人気のお接待所・おやすみなし亭 森千津子さん（徳島市）
 - ・ 毎月地域ぐるみでお接待する松本大師堂 依光栄さん（高知市）
 - ・ 12 番札所焼山寺の山中でお接待をする地域のおばちゃんたち（徳島県名西郡）
 - ・ 90 歳、お接待が生きがいの農家の奥代初子おばあちゃん（高知県土佐久礼）
 - ・ 写真撮影でお接待するアマチュアカメラマン（吉野川市）
 - ・ お遍路さんに励ましの声掛けのお接待をする大月小学校（高知県幡多郡）
 - ・ 鴨の湯・善根宿（吉野川市）
- 愛媛県内で代表的なお接待所は、三坂峠の旧善根宿「坂本屋」で地域の方がお接待をしている。そのほか、不定期でお接待しておられるところが多いと思う。
- 現在行われているお接待は、昔と比べてあまり変わりはないように思う。

【札所の現状と今昔】

- 歩き遍路を親身になってお世話される札所と事務的に対応される札所が、はっきりと分かれてきたように思う。

お遍路さんは、年間 15 万人、そのうち歩き遍路さんは5千人くらいと言われている。

お遍路の原点は歩き遍路であり、スタンプラリーではないと思う。もっとも、お遍路の回り方は自由であり、決まった形があるわけではない。
- 四国八十八ヶ所霊場の札所の僧侶の中に、いろんな事情もあるとは思いますが、歩き遍路をしたことがない僧侶がいることが不思議である。

【その他遍路について思うこと】

- 四国八十八箇所霊場と遍路道を世界遺産にしようと四国の行政・民間組織・大学等が一丸となり 2016 年までに国の暫定リスト入りを目指しているが、一番の問題点は、中心となる行政や民間組織・大学等関係者が、四国八十八ヶ所遍路道を歩いた経験がない人が多いということである。このような企画の中心になる人こそ険しい山中の遍路やお接待の現場の様子等、台風、雨、風、雪などの厳しい自然の中を結願目指して、歩くお遍路さんの生の体験をしていただくことがより効果的な対応策の決め手につながると思う。たとえ一国打ちでもいいので、歩いて遍路道の実態を見て体験してほしい。しかし、一日体験遍路くらいで歩き遍路のことが分かったような気になる軽く浅い認識だけで、方針を決めるのはやめてほしい。
- 私たち、歩き遍路先達や遍路道を整備している各地のボランティア、お接待関係者等、現場の方々の意見に耳を傾けながら、世界遺産の登録を目指すと共に、貴重な遍路道をどうやって後世に引き継ぐのかを真剣に対策を考えてほしい。

お接待をしているグループ代表へのヒアリング結果について（10/30）

日 時：平成25年10月30日（水）17:00～17:50

相手方：伊方町 農業 塩崎満雄さん

【遍路の概況】

- 自分たちのグループがお接待を行っている場所は、58 番札所の仙遊寺の境内である。他の場所ではやっていない。札所の境内の中でお接待をしているのは珍しいと思う。境内でお接待をしている例は、自分が知る限りでは2ヶ所だけである。我々のグループは住職と懇意になったので、寺の厚意により境内でやらせてもらっている。普通は札所の近くの道沿いで行うことが多い。
- 自分たちのグループがお接待を始めたのは去年の秋からで、年間を通してお接待を行っている。ただ、1月～3月は農繁期（晩柑類の取り入れ時期）なので、お接待に行くのはなかなか難しい。活動時期は、主として4月～11月になる。お接待の頻度はほぼ1ヶ月に1回で、私の地元の伊方町井野浦地区の6～10人のグループで実施している。最近では今治から応援に来てくれる人もいる。
- 自分たちがお接待を始めたきっかけは、世界遺産化の会に出席してみて、へんろ道文化を世に知らしめるためには、ハード面よりもむしろソフトが大切と感じたからである。世界遺産化そのものよりも精神的なものが大切ではないかという部分に着目してお接待を始めた。自宅から遠い58 番札所の仙遊寺でお接待をしているのは、たまたま仙遊寺の住職とつきあいがあったので、その寺へ行くことにした。
- 自分たちが行っているお接待の内容は、季節によって異なるが、4～8月は、手絞りのみかん（柑橘）ジュースの提供である。絞る果実の種類は、「清見（タンゴール）」や「サンフルーツ」などである。自分たちが栽培した柑橘を持ち込んで絞って提供しているので原材料費はあまりかからないが、1回のお接待でコンテナ4～5杯分で80～100 kgの柑橘を使う。提供するコップの数で言うと200～250杯分になる。
- 季節によって品物を変えるので、ジュースのほかには、餅、だんご、蒸しパン、寒い季節にはぜんざいをふるまうこともある。また、その時々で珍しいものとしては、伊勢エビの味噌汁や夏にところてんを出したこともある。餅は「やぐら（足でつく杵と臼）」を持ち込んで、年1回はその場でつくことにしている。

その際には5臼、餅の数で200個くらい作る。

- 自分たちの渡したものをおいしいと言ってもらえるのが一番うれしい。
- お接待で食べ物を出すに際して、最も問題になる点は衛生面の管理である。せっかく善意で提供した食べ物で、お遍路さんが腹でも壊したら何にもならない。特に夏場は食べ物が傷まないように気を使う。
- 我々のグループ特有の悩みとして、自宅からお接待する場所までの距離が遠いことである。(自宅：伊方町(旧三崎町)、お接待場所：今治市(旧玉川町)) また、お接待グループのメンバーが高齢化しており、いつまで継続できるかが問題である。意思を引き継いでくれる若い人がいればよいのだが今のところはいない。
- お遍路さんをその目的で分類すると、観光が主な目的で回っている人は、もの欲しそうな顔をしている。
- お遍路さんに対するお接待ではないが、自分の住む伊方町の集落では、昔は、春と秋に「お大師さんの日」という「お接待の日」があって、集落内で皆が食材を持ち寄って互いにお接待を行う習慣があった。自分はその思いをつなぐつもりでお遍路さんに対するお接待を行っている。
- 若いお遍路さんの中には、お接待を断る人もいないことはないが、歩き遍路の人はお接待の申し出を絶対に断らない。車で回っているお遍路さんに対しては、お接待をしないという人もいる。
- お接待を分類すると、「品物」と「精神的なもの」の2つに分けられると思う。精神的なものの例としては、コンビニで道を尋ねると、わざわざ何百メートルも案内して連れて行ってくれた人がいてありがたかった。
- 自分が受けたお接待(品物)で珍しいものとしては、鍋敷などの雑貨品をもらったことがある。遍路をする途中で使うものではないが、断ってはいけないことになっているので、ありがたくいただいた。

【へんろ道の状況】

- 今はあまりひどい道はないと思う。朝いちばんの札所の周囲の道は、特に掃除

が行き届いていてきれいである。町道などで一部狭いところもあり、朝夕などの時間帯に通行量が多く狭いところもある。

- 60 番横峰寺へ登る森林組合管理の林道は、有料になっていてがっかりした。
- 我々のグループは、地元ではない場所でお接待をしているので、へんろ道の草刈りまでは行っていない。もし、地元に札所やへんろ道があれば、道の草刈りもやると思う。

お接待をしているグループ代表へのヒアリング結果について（11/23）

日 時：平成25年11月23日（土）10:00～12:00

相手方：松山市窪野町 石材業 相原誠則さん

【お接待の概況】

- 自分たちのグループがお接待を行っている場所は、窪野町の旧遍路宿の坂本屋である。坂本屋の場所は、三坂峠からへんろ道を下ってきて、46 番札所の浄瑠璃寺、47 番札所の八坂寺へ向かう途中である。
- 自分たちのお接待の頻度は、毎週土、日曜日に実施している。皆仕事があるので、平日はできない。メンバーは、地元の校区内の人約 8 割（約 26 人）、校区外の人（教員、公務員など）が 2 割（5～6 人）である。メンバーを 6 班に分けて、担当する日を決めて当番制で実施している。合計で月 8 回程度実施しており、一人につき、月 1～2 回当番が回ってくる。地元の坂本小学校の先生もメンバーに加わってくれている。
なお、冬場（12 月～2 月）は、（坂本屋は）閉めている。
- 自分たちのグループがお接待を始めたのは、約 10 年前の平成 16 年からである。きっかけは、松山市が提唱していた久谷地区の活性化方策を受けて、平成 14～16 年に、地域でいろいろなことをやってみようということで、昭和 23 年頃まで営業していた旧遍路宿の坂本屋を修繕することから始めた。修繕が終わると、そこで、十数名の地元民がボランティアでお接待を始めた。
- 坂本屋は、かつては、遍路宿というだけでなく、三坂峠を馬の背に乗せて行き来した物流の拠点であり、旅籠、雑貨屋、食料品店を兼ねた建物で、東雲短大の犬伏先生から往時の雰囲気を残す貴重な建物なので残すべきであるという指導を受けて、修復・保存することとした。修繕作業は、自分たちでやろうということで、つてを頼って、大工や電気工事店、水道屋などに来ていただき、無償で作業をしてもらった。メンバーが数千円の材料費を持ち寄ったが、行政の補助金はもらっていない。
- お接待を始めた頃は手際も悪かったが、10 年も経つと皆仕事の流れがスムーズになってきた。先日、駐日スペイン大使や知事が坂本屋を訪問した際も、慌てることなくお接待ができた。10 年前に偉い人が来ていたらあたふたしたと思う。たいしたことはできないが、できる範囲で土日だけ自然体で（お接待を）やろ

うという感覚でやっているのです、今まで続けられたのだと思っている。

- メンバーは、高齢の方が亡くなったり、転勤していく方がいる一方で、20～30代の方が加わったりして、少しずつではあるが世代交代している。坂本屋が遍路を題材にしたNHKのTVドラマのロケに使われたこともあって、最近少しメジャーになってきて、若い人がお接待ボランティアに来ることに対しても会社の上司の理解が得られやすい環境になってきたように感じている。
- お接待の品物は、お茶、餅、菓子、みかんなど。メンバーの昼食のラーメンをおすそ分けしたこともある。

【お接待するうえでの問題点】

- 自分たちのグループは、男性中心の活動メンバーになっており、女性はおばあちゃんが2～3人いるだけなので少ない。50代の女性も少しずつ参加してくれる人が出てきた。メンバーには無理には活動に参加させないようにしており、無理のない活動の進め方にしている。
- 坂本屋は個人所有の建物なので、NPO（地域共創研究所NORA）が借りる形で使わせてもらっている。修繕はNPOが行っているが、最近雨漏りするようになって修繕費の捻出に苦慮している。知事が坂本屋を訪問した際に、修繕に対する支援を依頼したが、個人所有の家なので県が直接補助するのは難しいが、何らかの形で協力を検討したいとの返答だった。（近年、NORAは休眠状態で、「坂本屋運営委員会」が管理している。）現在、修理のための寄附集めを計画中である。

【お接待する理由について】

- お接待をするのに大げさな哲学はなく、田舎の仲間のコミュニケーションの場として続けている。もちろんお遍路さんをもてなす気持ちはあるが、義務感ではなく、むしろ何となく続けているような感じである。今後も無理なく続けていきたい。
- 坂本地区には2つの札所があるが、お接待をするのは札所に頼まれたわけでもなく、メンバーも必ずしも札所の檀家というわけでもない。
- もともと窪野地区には屋号が「茶屋」の家があり、坂本屋と関係なくお接待をする風習があった。坂本屋は、馬子たちが馬を停める物流拠点だったし、三坂

峠を上り下りする人の往来が多く、坂本屋の他にも宿があった。現在、浄瑠璃寺前にある遍路宿の「長珍屋」は、もともとは本当に提灯屋だった。

- 坂本屋は、急な三坂峠を下ってきて里まで出てやれやれという気持ちになるところに位置しており、誰もが一休みしたくなる場所にある。お茶やミカンなどのありふれたお接待だが、感謝されることが多い。情報化社会になり、スマホやタブレット端末を持ち歩いているお遍路さんもいて、坂本屋のことを事前に知っている人も多い。

【へんろ道の状況】

- 峠を下ってきたお遍路さんから、途中の山道に倒木があったと聞いて、倒木をチェーンソーで切りに行くこともある。道の修繕も、ちょっとしたことで自分たちでできることは自分たちで臨機に修繕している。重機が必要なほどの崩れや県道の傷みは、県へ修繕を依頼している。

「四国遍路道文化の継承についての調査事業」に関する聞き取り調査項目

1. 札所（住職）からの聞き取り項目

- (1) 現在、どのようなお接待が行われているか
- (2) 今昔のお接待の変化の有無
- (3) お接待の変化の内容
- (4) お接待が変化した理由
- (5) お接待の今後について（どうあるべきか）
- (6) へんろ道の問題点の有無
- (7) へんろ道の問題点の内容
- (8) その問題点にどのように取り組むべきか
- (9) 今昔の遍路（巡礼者）の変化の有無
- (10) 遍路（巡礼者）の変化の内容
- (11) 遍路（巡礼者）の変化について思うこと
- (12) その他四国遍路について思うこと

2. ベテラン遍路さんからの聞き取り項目

- (1) 年齢・性別
- (2) 歩き遍路の経験（年数・回数）
- (3) 歩き遍路の魅力
- (4) 歩き遍路から見たへんろ道の問題点
- (5) その問題点の解決方法として考えられること
- (6) 今昔の遍路（巡礼者）の変化の有無
- (7) 遍路（巡礼者）の変化の内容
- (8) 現在、どのようなお接待が行われているか
- (9) 今昔のお接待の変化の有無
- (10) お接待の変化の内容
- (11) お接待が変化した理由
- (12) 今昔の札所の変化の有無
- (13) 札所の変化の内容
- (14) 変化についての感想
- (15) その他四国遍路について思うこと

3. お接待グループからの聞き取り項目

- (1) 活動場所はどこか

- (2) 何年前から活動しているか
- (3) お接待（活動）内容の変化の有無
- (4) お接待（活動）内容の変化の内容と理由
- (5) お接待（活動内容）の変化について思うこと
- (6) お接待（活動）するうえでの問題点の有無
- (7) その問題点の内容
- (8) その問題点の解決方法として考えられること
- (9) お接待（活動）をする理由
- (10) お接待（活動）をするうえでの札所との連携の有無
- (11) お接待を受けた遍路（巡礼者）の反応
- (12) 今後のお接待（活動）はどうしていきたいか
- (13) へんろ道の維持（草刈りなど）や保存活動をしているか
- (14) 具体的にはどのような活動をしているか
- (15) 維持・保存活動をする理由
- (16) 自分たちの活動で解決できない問題点
- (17) 問題点を改善するために考えられる方法



文化芸術立県えひめを考える委員会

代表幹事	森 一哉	(株)クロス・サービス	社長
〃	薬師神 績	星企画(株)	代表取締役
委員長	桑波田 健	岡田印刷(株)	代表取締役社長
副委員長	越智 陽一	(株)ジョイ・アート	代表取締役社長
〃	松浦 吉隆	(株)美工社	代表取締役社長
〃	三瀬 明子	(有)マルコボ. コム	代表取締役
委員(東予)	森実 秀郎	森実機工(株)	代表取締役
委員(中予)	梅木 要	松山観光港ターミナル(株)	専務取締役
〃	戒田 順	(株)戒田商事	会長
〃	川添 紀明	三愛建設(株)	代表取締役
〃	菅 啓三	(株)公益社	代表取締役
〃	菅野 成彦	愛媛土建(株)	取締役副社長
〃	五味 久枝	トヨタカローラ愛媛(株)	社長
〃	佐伯 裕子	佐伯ビル管理(株)	代表取締役社長
〃	佐古 英樹	(株)杉野工務店	常務取締役
〃	戸梶 直美	(株)ケアセンターとかじ	代表取締役
〃	中村 哲也	(有)ナカムラマーク	代表取締役
〃	永木 昭彦	(株)松山三越	代表取締役社長
〃	藤田 皓二	(株)アスティス	代表取締役社長
〃	松井 宏治	(株)エリアサポートイーズ保険	代表取締役
〃	松岡 久美	(株)三真	代表取締役社長
〃	村上 恵一	(株)エム・エスエンタープライズ	代表取締役
〃	山澤 満	(名)山澤商店	代表社員
委員(南予)	野本 政孝	(株)サンメディカル	社長
アドバイザー	谷川 昭司	(公財)えひめ地域政策研究センター	研究部長
〃	渡部 卓	(公財)えひめ地域政策研究センター	研究員